

明治から大正における女性同性愛の社会的排除

ー性科学の登場によって起こった抑圧ー

関西学院大学 氏名 原田理子 (009546)

キーワード3つ：歴史研究、同性愛嫌悪、社会的排除

1. 研究目的

現在の日本において、同性愛者をはじめとするセクシャルマイノリティーの人々は、異性愛を前提とされた社会の在り方によって起こる、排除に苦しめられている。社会から排除されることにより、存在が見え難くなるだけではなく、彼らが抱える問題までもが一緒に見えなくなってしまうからだ。本報告は、特に女性同性愛者に注目していきたい。なぜなら女性同性愛者は男性同性愛者以上に見えない存在となっているからだ。女性には「性的欲望が存在しない」というフィクションを付与されているだけではなく、同性への性的欲望は友情に無理やり内包されることによって秘匿され、存在を否定される（杉浦 2011：59）。女性同性愛者という存在が、いかに排除されていたかという根幹を明らかにすることは、いまだ先行研究が乏しい女性同性愛者の歴史研究の、一つの足掛かり的存在になれる可能性を秘めている。さらに、セクシュアリティが社会的、文化的に作られたものであることを証明することが、同性愛差別理解の第一歩になると考えている。

2. 研究の視点および方法

歴史研究の手法をとった文献研究を主とする。同性愛やそれに類似する存在が、歴史的にどのように扱われていたかを、当時の言説もしくは先行研究の成果によって明らかにする。そして、当時の人々がどのような思想を持っていたのか、どのような概念を共有していたのかを考察していく。中でも、性科学を専門とした雑誌『変態性欲』を創刊号（1922）から最終号（1925）までを精査、考察することで、当時、性科学がどのように研究され、必要とされていたのかを明らかにする。

3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会の「研究倫理規程」に基づき配慮した。

4. 研究結果

セクシュアリティは自然に成立したものではなく、社会的、文化的に作られてきたことを明らかにした。女性の性は当時の国際情勢、軍国主義、優生思想などを背景に、政府によって統制された。

雑誌『変態性欲』を精査することで、当時性科学において、女性の性や同性愛をど

うとらえていたのかが分かった。性科学では、同性同士の性愛関係は「異常な性欲」とされ、遺伝的な要素も示唆される「何らかの先天性異常」もしくは「道徳的な墮落」とされた。論者によっては、同性愛は治療もしくは予防しなくてはならない、一種の精神的な病ともされた。そして、未婚の女性は性欲を持たず、結婚して初めて性に目覚めると考えられた。女性同士の性愛関係も「異常な性欲」の実例として散見される。

『変態性欲』は、内容としては伝聞や海外の研究の紹介等も多く、今日的な視点から見ると根拠に乏しく、実際にそのような実例があったのか怪しいものも多い。しかし、重要なのは『変態性欲』に書かれた実例や研究が正しいかどうかよりも、『変態性欲』を読んだ当時の人々がその雑誌によってどのような情報を得たか、ということであろう。

5. 考察

性科学の登場によって、それまでは異性愛と両立できると考えられた同性同士の性愛関係は、異性愛と分断され、同性間性行為を行う人は異常な人である、というステイグマが与えられた。つまり、異性愛／同性愛という二元化が正常／異常という二元化と結びつき、同性間性行為を実践する人は「異常な性欲」を持つ人として排除の対象になり、周縁化される構造が歴史的、社会的、文化的に作り出された。

女性は前述の通り、男性よりも性欲が弱い、もしくはほとんど無いと考えられていた。性欲が無いはずの女性が、主体的に性愛を持つ、「同性愛」であるということは、二重の意味で「異常」とされたのではないか。女性の性は、出産に結びつく結婚内の性以外は「貞操」によって封じられていた（木村 2015 : 201）。これは、国家が女性を「軍国の母」としていく中で、より強化されていった価値観だろう。『変態性欲』内においても、女性の貞操の重要性が指摘されている。性科学は同性愛の異常性を提示し、異性愛主義を醸成しただけではなく、女性の性の統制も後押ししている。近代国家として発展していく一つの方法として、科学の名の下に、国家による国民の性の統制が推し進められていくのだった。このように、様々な要素が組み合わさり、現在の異性愛を絶対的正義とした、抑圧的な同性愛差別が形成されていく基盤になっていると言える。

・引用・参考文献

赤枝香奈子（2011）『近代日本における女同士の親密な関係』角川学芸出版

木村朗子（2015）「第4章クィアの日本文学史—女性同性愛者の文学を考える」三成美保編著『同性愛をめぐる歴史と法—尊厳としてのセクシュアリティ—』明石書店 184—211

杉浦郁子（2011）「第2章レズビアン／主体／排除を不可視にする社会について」好井裕明編、『セクシュアリティの多様性と排除』明石書店

竹村和子（2002）『愛について—アイデンティティと欲望の政治学—』岩波書店